希望の助辞「もがな」「がな」をめぐって（一）

森脇茂秀

1、はじめに
2、中世前期の「がな」
2－1、『古本説話集』『宇治拾遺物語』中の「がな」
2－2、『平治物語』中の「がな」
2－3、『延慶本平家物語』中の「がな」
2－4、『徒然草』中の「がな」　（以上、本稿）
3、中世後期の「がな」
3－1、キリシタン資料中の「がな」
3－1－1、『日葡辞書』ロドリゲス『日本大文典』中の「がな」
3－1－2、『天草版平家物語』『天草版伊曽保物語』中の「がな」
3－2、狂言台本中の「がな」
3－2－1、『天正狂言本』中の「がな」
3－2－2、『大蔵虎明本狂言集』『大蔵虎清本狂言集』中の「がな」
4、おわりに　（以上、続稿）

1　はじめに

古代語における希望表現を担う助辞の史的変遷のプロセスについて、稿者は「希望表現の一形式－助辞「もが」・「てしか」形を中心に－」（「山口国文」17〈一九九四・三〉）、「終助辞「かし」をめぐって」（「山口国文」22〈一九九九・三〉）で、「てしか」形、「かし」を取り上げ、その意味用法、衰退理由等を考察した事がある。それを、簡潔に纏めて示すと次のようになる。

（1－1、「てしかな」の史的変遷）

〈「てしかな」の変遷過程〉

【旧】	【新】
（いかで）～てしかな（散文）	（いかで）～てしかな だに～てしかな

		（いかで）～てしかな
（散文）	（いかで）～てしかな	だに～てしかな

「もがな」は元来、「詠嘆的希望」を表現する形式であり、「対象的希望表現」であった。ところが、「てしかな」が希望対象をより限定するようになると、『「行為」から『対象』へ」「てしかな」の希望の焦点が移行し、「対象的希望」である「もがな」と近似の性質を有するようになったため、「てしかな」が衰退した。

（1－2、「かし」の史的変遷）

【中　古】言語主体の判断（断定）／心理（待ち望み）（＝言わば「詠嘆的希望」）

【中世後期】言語主体の判断（断定）／「ぞかし」

＜文章語＞

希望（＝主体的希望（「（副詞句）――――かし」）

心理（＝詠嘆的希望（「依頼用法」／「命令用法」）

終助辞「かし」は、中世後期に希望表現として用いられるに至った。その要因として、「てしかな」同様、『「詠嘆的希望表現」から「主体的希望表現」へ』と変容したこと、またそのとき対象を限定する副詞句（「願はくば」「あはれ」等）が重要な役割を担うということ、併せて、「かし」自体には「対者に持ちかける」「対自性」といった職能は存しない、それらは付加的な職能であること、等を述べた。

以上、これらによって、助辞による希望表現形式の史的変遷については、

▽（a）「――――助辞」形　↓

（b）「（副詞句）――――助辞」形

へと変容することによって、（a）よりも（b）が、より「主体的」表現形式となり、そのため衰退してゆくことが明らかとなった。

ただ、ここで問題点として浮上するのは、「もが」形である。この「もが」形については、「もがな」が「がな」と語形を替えながら近世期まで残存し、その意味用

法も変容したものがある、とする指摘もあるが(注1)、「もが」形が、希望表現の中で如何なる変容を遂げ、衰退したのか、ということは、未だ全てが明らかになったわけではないと思われる。したがって、本稿においては、「もが」形、特に「もが（な）」から派生したと思われる「がな」を中心として、その史的変容のプロセスを明らかにすることで、助辞による「希望表現形式」の変遷過程を明らかにしたい、と思う。

2　中世前期の「がな」

上代には「もがも」形が優勢であったが、中古には和歌を除いて用いられず、「もがな」形が優勢となり、それも「も・がな」（本来は「もが・な」）という語構成が意識され始めると「を・がな」形が生じ、ついには、「がな」という形態が生じる。ここでこれら「もがな」「がな」の用例数を表にして纏め（〈表Ⅰ「もがな」〉、〈表Ⅱ「がな」〉参照）、また、中古の「もがな」の承接語を表にして示すと次のようになる（〈表Ⅲ「中古「もがな」承接語〉）(注2)。

〈表Ⅲ「もがな」の承接語〉

作品名	承接語	語句	用例数
古今集	①体言	時(1)・人(1)・宿(1)・よし(5)	8
	②打消	ず(1)・なし(2)	3
伊勢物語	①体言	笠(1)・道(1)・よし(1)	3
	②打消	ず(1)・なし(1)	2
蜻蛉日記	①体言	わざ(1)・雨間(1)・よし(1)	3
	②格助詞	に(2)	
源氏物語	①体言	人(6)・対面(1)・わざ(4)・報ひ(1)・ちご(1)・よし(1)・まぼろし(1)・たましひ(1)・鬼僧(1)	18
	②打消	ず(5)・なし(2)	7
	③格助詞	にもがな(6)・ともがな(1)	7

ここで問題とする「中世前期」は、〈表Ⅰ〉、〈表Ⅱ〉から、まさに、「もがな」から「がな」へ、の転換期であると考えられる。以下、作品別に用例に則してコメントし、「もがな」「がな」の意味用法を考察する。

（以下、傍線は稿者。「心話文」は〈　〉で示す。）

〈表Ⅰ「もがな」の用例数〉

作品名	成立年代	もがな	（と）もがな	（を）もがな	（こと）もがな	（もの）もがな	備考
三宝絵詞	(984)	0					
今昔物語集	(1120～40)	3	1	1			
法華百座聞書抄	(1110)	0					
古本説話集	(1126～1201)	1					
佛教説話集	(1140)	0					
千載和歌集	(1188)	8	1				
宇治拾遺物語	(1210頃)	1					
方丈記	(1212)	0					
保元物語	(1221)	0					
平治物語	(1221?)	0					
宝物集	(鎌倉初期)	1					和歌中の用例／歌語
延慶本平家物語	(1309)	4	1				
徒然草	(1330頃)	1					
遊仙窟	(1344)	0					
太平記	(1374)	7	1				
湯山聯句抄	(1504)	0					
天草版平家物語	(1592)	2	1				あっぱれ…もがな 1
天草版伊曽保物語	(1593)	0					
天正狂言本	(1578?)	2					
大蔵虎明本狂言集	(1642)	4					
大蔵虎清本狂言集	(1646)	0					
きのふはけふの物語	(1624)笑話	1					
鹿の巻筆	(1686)笑話	0					
軽口露がはなし	(1691)笑話	0					
軽口御前男	(1703後)笑話	0					
聞上手	(1772)笑話	0					
鹿の子餅	(1772)笑話	0					
鯛の味噌津	(1779)笑話	0					
無事志有意	(1798)笑話	0					
好色一代男	(1682)西鶴	5			2		
好色一代女	(1686)西鶴	4			1		
好色五人女	(1686)西鶴	3			1		
日本永代蔵	(1688)西鶴	2					
世間胸算用	(1692)西鶴	2			1		
曾根崎心中	(1703)近松	0					
冥土の飛脚	(1711)近松	0					
国性爺合戦	(1715)近松	0					
博多小女郎波枕	(1718)近松	0					
心中天の網島	(1720)近松	0					
女殺油地獄	(1721)近松	0					
心中宵庚申	(1722)近松	0					
雨月物語	(1768～76)	1					
辰巳之園	(1770)	0					
玉くしげ	(1787)	0					
浮世風呂	(1809)	0					
計		52	5	1	5		

〈表Ⅱ「がな」の用例〉

作品名	成立年代	がな	(命令形)がな	(何)がな	(誰)がな	(どこ)がな	(何と)がな	(を)がな	(こと)がな	備考
三宝絵詞	(984)	0								
今昔物語集	(1120～40)	0								(てしかな) 2
法華百座聞書抄	(1110)	1						1		
古本説話集	(1126～1201)	1						1		
佛教説話集	(1140)	0								
千載和歌集	(1188)	1						(詞書) 1		(をがな)「周防内侍集」に同一箇所あり
宇治拾遺物語	(1210頃)	2		1						
方丈記	(1212)	0								
保元物語	(1221)	0								
平治物語	(1221?)	1								(あはれ…がな) 形
宝物集	(鎌倉初期)	0								
延慶本平家物語	(1309)	3							(何事) 1	
徒然草	(1330頃)	1		1						
遊仙窟	(1344)	0								
太平記	(1374)	0								七井本(がな) 0
湯山聯句抄	(1504)	0								
天草版平家物語	(1592)	1								
天草版伊曽保物語	(1593)	1				(どこでがな) 1				
天正狂言本	(1578?)	6		2 (何…物がな1)						(何…ものがな) 1
大蔵虎明本狂言集	(1642)	30		9	4(誰とがな1)		17			(まいがな) 1
大蔵虎清本狂言集	(1646)	3		1		1				(まいがな) 1
きのふはけふの物語	(1624)笑話	2		1				(何をがな) 1		
鹿の巻筆	(1686)笑話	1		1						
軽口露がはなし	(1691)笑話	2		1	1					
軽口御前男	(1703後)笑話	2		1					1	
聞上手	(1772)笑話	0								
鹿の子餅	(1772)笑話	0								
鯛の味噌津	(1779)笑話	0								
無事志有意	(1798)笑話	0								
好色一代男	(1682)西鶴	5		2						
好色一代女	(1686)西鶴	0							1	
好色五人女	(1686)西鶴	0								
日本永代蔵	(1688)西鶴	1	1							
世間胸算用	(1692)西鶴	2	1	1						
曾根崎心中	(1703)近松	0								
冥土の飛脚	(1711)近松	1								
国性爺合戦	(1715)近松	0								
博多小女郎波枕	(1718)近松	0								
心中天の網島	(1720)近松	0								
女殺油地獄	(1721)近松	1		1						
心中宵庚申	(1722)近松	0								
雨月物語	(1768～76)	1								
辰巳之園	(1770)	0								
玉くしげ	(1787)	0								
浮世風呂	(1809)	0								
計		69	2	21	5	2	17	4	3	

2－1　『古本説話集』『宇治拾遺物語』中の「がな」

［用例1］人ありて、『盗みたるか』など言はれんもよしなし。やをらこれを賣りてばや」と思ひて、「かやうの所に馬など要する物ぞかし」とて、おり走りて、寄りて、「もし馬などや買はせ給ふ」と問ひければ、〈馬をがな〉と願ひ迷ひけるほどに、この馬を見て、「いかにせん」とさわぎて、（略）

（『古本説話集』下　五八　九八オ　一九五ペ）

［用例1］は『古本説話集』の用例であり、後接の「と願ひ迷ひけるほどに」とあることから「心話文」中に表れた終助辞「がな」の用例である。山内洋一郎『古本説話集総索引』（風間書院〈昭44〉）「頭注」には、「『をがな』は落窪、源氏より出て、院政期に散見する語法」と指摘されている。〈表Ⅱ〉を見ると、「をがな」は、『きのふはけふの物語』に表れているが、主に院政期の作品に散見され、「がな」を遊離分立させた直接的な要因と見なしてよいのではないかと考えられる。

また、『宇治拾遺物語』には、「もがな」が一例、「がな」が二例、用例が存する。

［用例2］この馬（むま）京に率てゆきたらんに、見しりたる人ありて、盗みたるかなどいはれんもよしなし。やはら、これを買りてばやと思て、かやうの所に馬など用なる物ぞかしとて、おり走てよりて、「もし馬などや買せ給ふ」と問ひければ、〈馬がな〉と思ける程に、この馬をみて、「いかゞせん」とさはぎて、「たゞ今はかりぎぬなどはなきを、この鳥羽の田や米などにはかへてんや」といひければ、（略）

（『宇治拾遺物語』　二三二ペ）

［用例3］いかなるべきことにかなど思へども、佛の「たゞまかせられてあれ」と、夢にみえさせ給（たまひ）しをたのみて、ともかくも、いふにしたがひてあり。この女、曉たゝんまうけなどもしにやりて、いそぎくるめくがいとほしければ、〈なにがなとらせん〉と思へども、とらすべき物なし。（『宇治拾遺物語』　二六七ペ）

［用例2］は、前接箇所に格助詞「を」を伴わず、「が

な」単独で終助詞として出現した終助辞「がな」の用例であり、[用例1]同様「心話文」中に用いられている。また、[用例1]「馬をがな」、[用例2]「馬がな」と承接語が「馬」で共通し、同一場面での使用から、「をがな」から「がな」へ、の派生を窺うことができるように思われる。

[用例3]は、疑問詞「なに」と共起した「がな」の用例で、「がな」で文が終止することなしに、「なにがな――ん」で、文が終止する形式である。この用法は、中古には出現せず、「副助辞」的な新用法であり、〈表Ⅱ〉からも明らかなように、後世、「がな」の主用法となる。そして、それが「中世前期」の段階から出現している、ということもおさえておきたい、と思う。

2－2 『平治物語』中の「がな」

一方、『平治物語』には、「もがな」は用例を見ないが、「がな」は一例存する。

[用例4] 矢だねも射つくし、弓も引（き）おれてすてぬ。太刀もうちおり、おれ太刀ばかりひっさげ、〈あはれ御方（みかた）がな、太刀を乞はばや〉とおもふところに、同国の住人足立の右馬允（うまのぜう）遠元（とをもと）いで來る。（『平治物語』二三五ペ）

[用例4]は「心話文」中に、希望の助辞「ばや」と共に用いられている「がな」の用例であるが、この用例は、副詞句「あはれ」が先行し、「[あはれ]――がな」という形式になっている、「副詞呼応形」である。この用法は、

▽（a）「――――助辞」形 →

（b）「[副詞句]――――助辞」形

の「（b）「[副詞句]――――助辞」形式」にあたり、中古の「てしかな」、中世期の「かし」同様、副詞句と共起することで希望の対象を主体的に望む「主体的希望表現」である、と考えられる。

2－3 『延慶本平家物語』中の「がな」

『延慶本平家物語』には、「もがな」が四例（「と・もがな」一例）、「がな」が三例、用例が存する。

［用例5］（略）＜コヽハ都近クテ振舞（ふるまひ）ニクシ。哀（あはれ）イヅチモ哉＞ト、アクガレ思召（おぼしめし）ケルニ、付進（つきまゐら）セタリケル尼女房（あまみようばう）ノ便ニテ、「（略）」ト申ケレバ、（略）　（第六末　四六四ペ）

［用例6］門脇宰相（かどわきのさいしやう）ハ、＜イカナル次（ついで）モガナ。丹波少将ガ事、申宥（まうしなだめ）ム＞ト被思（おもはれ）ケルガ、此ノ折ヲ得テ、イソギ小松内大臣ノ許ヘオハシテオワシテ、御産ノ御祈ニサマ〳〵ノ攘災行ハルベキ由聞（よしきこ）ユ。　（第二本　二三四ペ）

［用例7］承平将門（しようへいのまさかど）討テ名ヲ揚（あげ）シ、俵藤太秀郷（たはらとうだひでさと）ガ八代末葉（はちだいのはつえふ）、上野国佐井七郎弘資（ひろすけ）ト名乗（なのり）ケレバ、富部（とべの）三郎取アヘズ、「＜和君（わぎみ）ハ次ガナ氏文（うぢぶみ）読（よま）ム＞ト思ケル者哉。家俊ガ品（しな）ヲバナニトシテ藺（きらふ）ゾトヨ。（略）」（略）　（第三本　六五五ペ）

［用例5］は心話文中の「もがな」用例であるが、［用例4］「がな」のように、副詞「あはれ」が先行し、「［あはれ］――もがな」形となっていること、また、直接承接する体言が「いづち」という不定語であることに着目したい。

［用例6］は「もがな」、［用例7］は「がな」の用例であるが、承接語が両用例とも「次」であり、共通している。ただ、［用例5］は、心話文中に不定語「いかなる」が先行し、「イカナル――モガナ」形となっており、「もがな」の「副詞呼応形」と考えることもできようが（注3）、［用例7］は、引用節中の「和君（わぎみ）ハ次ガナ、氏文（うぢぶみ）読（よま）ム」を［用例3］「なにがな」同様、一纏まりと見れば、副助辞的な用法として捉えられるであろうし、「和君（わぎみ）ハ次ガ

ナ。氏文（うぢぶみ）読（よま）ム」と捉えると「がな」の終助辞用法と考えられるであろう。ここでは、［用例6］「もがな」、［用例7］「がな」には、用法的差異があり、［用例6］は「がな」の「終助詞用法」、［用例7］は恰も「已然形」的な用法、即ち、「ある事を述べつつ、更にその後に続ける働き」のような中間的用法で、「終助辞用法から副助辞用法へ」の過渡期用法である、と考えたい（注4）。

さらに、この用法を考える上で、助辞「かし」は示唆的である。「かし」は、「――――――かし。」から『さぞかし』――――――。」のように変容し、後者は慣用句的用法として現代語にも残存しているが、その中間的用法は「中世期」から「近世期」にかけて見られるのであり（注5）、助辞「がな」と並行的に捉えることができるように思われる。

［用例8］酒盛ナムドシテ、人モテナシ遊ブ有様モアシカラズ。〈サルベカラウ人ノ娘ガナ、云合セム〉ト思。サスガニ其モ思ヤウナル事ハナシ。サレバトナ、無下ナル態（わざ）ヲバセサセタクモナシ。

（第三本　五九七ペ）

［用例9］（略）法皇忽（たちまち）ニ逆鱗ワタラセ給テ、「コハ何者ゾ。奇怪也。北面ノ輩（ともがら）ハナキカ。シヤソクビ突侯ヘ」ト被仰下（おほせくだされ）ケレバ、〈何事（なにごと）哉（がな）、事ニ逢デ高名セム〉ト思タル者共、其数多カリケレバ、我モ〈ト走懸（はしりかか）ル。

（第二末　四七四ペ）

［用例8］は、「娘」という具体的希望対象が出現しているが、［用例9］は、「何」という不定語が承接語であり、「もがな」との相違が認められる。ただし、「何事」と形式体言「事」を伴っており、「なに・がな」と直接承接する形ではないことに注意したい。〈表Ⅱ〉から分かるように、形式体言「ことがな」は、この例の他に近世期に二例存するのみなのである。

また、これまでの「がな」は［用例8］［用例9］のように、主に「心話文」に用いられており、これは、中古の「もがな」と同質のものである、と考えられる（注6）。

2－4 『徒然草』中の「がな」

擬古文の『徒然草』にも、「もがな」が一例、「がな」が一例ある。

［用例10］冬、せばき所にて、火にて物煎（い）りなどして、へだてなきどちさし向（むか）ひて、多（おほ）く飲（み）たる、いとをかし。旅の假（かり）屋、野山などにて、「御肴（さかな）何がな」などいひて、芝の上にて飲（み）たるもをかし。いたういたむ人の、しひられて少し飲（み）たるも、いとよし。

（百七十五段　二三四ぺ）

［用例10］は、後接句に「いひて」とあることから、引用節は「会話文」中に用いられた「がな」であり、不定語「何」と「がな」が共起している。ここでは後接句は省略されているが、［用例3］『宇治拾遺物語』「なにがな」と同形であることに注意したい。

また、「がな」発生のプロセスとして、「も・がな」と分析され、その意識の基に『延慶本平家物語』［用例5］の「もがな」のように、「も哉」と表記されることは先学により指摘されているが、

［用例11］＜今日（ケフ）ヲ限（カギリ）ノ命（イノチ）共（トモ）ガナ＞ト思召（オボシメシ）ケル御悲（カナシミ）ノ遣方（ヤルカタ）ナサニ、（略）

（『太平記』（一）一八三ぺ）

［用例11］のような「と・もがな」が、「共（とも）・がな」と表記されていることにも着目したい、と思う。

以上、ここまでの中世前期の「がな」の意味用法を纏めると次のようになる。

【中世前期】

＜前代と同様＞「詠嘆的希望表現」（＜終助辞用法＞「歌語」に多し

＜中世語的要素＞

○副詞句「あはれ・・・がな」「あはれ・・・もがな」との呼応あり。

※「主体的希望表現＜終助辞用法＞」へと変容。

（→ロドリゲス）

○「［不定語＋がな］・・・・・（現在）／未来＜副助辞用法＞（う）」

（なお本稿に用いたテキストは、「古本説話集」山内洋一郎『古本説話集総索引』（風間書房＜昭44＞）、「日葡辞書」土井忠生他編『邦訳日葡辞書』（岩波書店＜昭55＞）、「ロドリゲス日本大文典」土井忠生訳『ロドリゲス日本大文典』（三省堂＜昭30＞）、「天草版平家物語」江口正弘『天草版平家物語対照本文及び総索引』（明治書院＜昭61＞）、「天草版伊曽保物語」井上章『天草版伊曽保物語』（風間書房＜昭39＞）、「天正狂言本」古川久『日本古典全書　狂言集　下』（朝日新聞社＜昭31＞（内山弘『天正狂言本　本文・総索引・研究』（笠間書院＜平10＞）を参照した）、「大蔵虎明本狂言集」北原保雄・池田廣司編『大蔵虎明本狂言集の研究　本文篇　上　中　下』（表現社　＜昭47～58＞）、「大蔵虎清本狂言集」川瀬一馬『謡曲狂言　増補国語国文学研究史大成8』（三省堂＜昭52＞）、その他は、『日本古典文学大系』（岩波書店）に依った。

また、用例採取は各種総索引を使用し、また、必要に応じて、漢字、仮名、句読点等の表記を改めた箇所がある。）

【注】

（注1）例えば、湯沢幸吉郎（一九五五）（二六三頁）には、次のように指摘されている。

文語に希望を表す「がな」があって「道もがな」「なくもがな」「得てしがな」等の如く用いる。抄物でもたまに

○セメテ京ヘノ便宜カナト思フテ…

（絶句、一一、二オ）

の如く現れるが、こゝに説く「ガナ」はそれの転じたものだろうが、それとは多少異る「ガナ」である。即ち希望の意を持ちながら、確かにそれと指さずに云うに用いる。

○飢テハアハレ何カナクワウ渇シテハ酒カナ飲ト思

フ　（四河、八ノ一、四八―四九）

○ナニヲカナマイラセウトスレトモ何モナイホトニ…

（桃、二、住持）

○酒家ノ門外ヲユイツカヘリツ何トカナ調法スベキヤトヤスライマワルソ　（若木、中、二一オ）

○何ニトシテガナ是レヲカヘサ（返金）ウド思フテ…

（蒙求、六、一三オ）

これ等は、すべて「ナリトモ……タイ」の意となるが、次の如く、希望の意なく、単に漠然と云うに用いることがある。

○……ト問ヘバ道理カナアルハソナセニナレハ…

（四河、二〇ノ二、六オ）

○何事カナ申シテ用ラレウト思タ

（史記、二八、六ウ）

（注2）中古「もがな」の意味用法については、拙稿を参照の事。

（注3）勿論、「あはれ」等のような副詞とは性格を異にするが、ここでは、不定語「いかなる」が先行していることに着目した。

（注4）「已然形」の職能については、山口明穂「係結びの変遷」（『築島裕博士古稀記念　国語学論集』汲古書院〈平7〉）参照。以下、「「ある事を述べつつ（終助辞）」の場合は、句点『。』、「更にその後に続ける働き（副助辞）」」の場合は、「読点『、』」で記す。

（注5）助辞「かし」の意味用法、変遷過程については拙稿を参照の事。

（注6）（注2）に同じ。

（もりわき・しげひで）